

シャンデリア煌めく宮廷の舞踏会。大広間に足を踏み入れた瞬間、令嬢たちの視線が一斉にわたしたちに注がれる。みんなもちろん、露骨にジロジロと見ることはない。ある令嬢は談笑する振りをしながら口元を扇で覆い、視線だけこちらに向いている。またあるご婦人はおつきの侍女になにか言いつける振りをしながら声を潜めてなにかを話していた。

それにいちいち傷つくことはもうないけれど、思わず夫に絡める腕の力を少し強くした。

「どうかしましたか？ レティシアさん」

「ううん、なんでもないの。気にしないで」

わたしを案じる夫であるクレースの、整った顔を見つめる。

冬の朝の、誰にも汚されていない新雪のように品よく輝く銀髪と、吹雪の間の晴れ間のような凜とした青い色を持つ切れ長の瞳。背もすらりと高く、才覚あふれた

若く美しい男。先代が貿易で財をなして勲章を下賜された新興貴族で家柄は古くないが、令嬢たちが熱い視線を注ぐのは無理もない。

そんな彼と結婚したのが、よりもよつて格式ある血筋のみが取り柄の重たい黒髪をした突出した才覚もない娘だつたらひそひそ意地の悪い話をしたくなるにきまっている。

わたしだつてもし当事者でなければ、どうしてこの二人が結婚したんだろうと首をひねつたに違いない。

ふう、と気づかれないようにため息をついた。けれども、どこかわたしが気落ちしていることが夫にはわかつたらしい。顔を覗きこまれて、心配そうに首をかしげられる。なんでもないわと笑つて見せて、クラスはどこか納得していないようだつた。

「レティシアさん、先ほど給仕がリング酒を持っていましたよ。取ってきますからここで待っていてください」

わたしの好物を覚えていてくれたのか、クラースがわたしの側から離れる。おとなしくその場で待っていると、先ほどまでは遠慮がちだったおしゃべりな令嬢たちが待ち構えていたかのように話しかけてきた。

「ごきげんよう」とあいさつを交わしたが、徐々に会話の雲行きが怪しくなつてくる。

「ところで、レティシア様。口さがない噂をされているのをご存じ?」

そう切り出した令嬢は気遣つてくれているように装っているが、目が笑つてない。

「……くちさがない噂?」

「そう、レティシア様が家名でクラス様に言い寄つて結婚されたのだというひどいことをおっしゃる人たちがいるんです。まったく、失礼な方たちよねえ?」

クスクス、と意地悪く笑う彼女たちになにかそれとなく言い返さないと口を開くが、頭が真っ白になつてしまふ。口のナカが渴いて、うまく言葉が出ない。

「それはひどいですね。ボクはそんなふうに思つたことなんて一度もありませんよ」「あ、あなた」

毅然とした声がした方向へ視線を向ければ、シードルを両手に持つた夫が立つていた。途端に慌ててそそくさと退散しようとする令嬢たちを引き留める。

「そのような誤解をした方がいらっしゃるならボクから説明に窺わなければ。いつたい誰なんですか？ そんなひどい噂を広めている人は」

いつも穏やかな声にはすこし怒氣がにじんでいる。令嬢たちは顔を見合させて困つていた。

「さ、さあ、わたしも誰が最初に言い出したのかはわからなくて」

「で、ですがお二人の仲睦まじさを拝見するはどうやら事実無根の噂だつたみたい

ですね」

「お、お邪魔しました」

笑ってごまかしながら散らばるように去つていった令嬢たちの背中を見送つて  
いると、クラースがぐいとリング酒を一気に煽る。

「まつたく、失礼な人たちだ。ボクが家名目当てであなたとレティシアと結婚した  
だなんて」

まだひと月ほどしか一緒に暮らしていないが、穏やかなクラースがここまで憤る  
のは珍しい。公然と侮辱される妻に、さすがにプライドを傷つけられたのかもしれ  
ない。

「わたしは、仮にあなたが家の名前目当てでもわたしと結婚してくれて嬉しいわ」  
声を潜めてそう告げれば、クラースにぐいと身体を引き寄せられる。

「そんなバカな冗談を言わないでください。レティシアには、そんな誤解をしてほ

しくない……」

「は、はひ」

切なく搾り出したような声に、まるで本当に想われてるようできゅうっとおなかの奥が切なくなる。はしたなく欲情しているのを悟られないように、わたしはひたすらちびちびとリング酒を舐めるように飲んだ。

——今日のクラスさん、かつこよかつたな。

夫婦の寝室で、ひとり物思いにふける。仕事が忙しい夫は、家にいても常に忙しくして、一緒の寝室で寝ることは稀だ。今夜も舞踏会から屋敷へ帰つてきただと、執事から呼び止められて着替えもせず仕事部屋へ行つてしまつた。

大人三人は余裕で眠れそうなサイズのベッドにはわたし一人しかいない。

「……言い返せなかつたのは、結局わたしがある人たちと同じことを考へてるからなんだよね」

今をときめく新興貴族の美男子と、古い家名以外なんのとりえもない女。家の都合で結婚した二人が愛し合つてゐる方がおかしい。

今日夫は庇つてくれたけれど、それもきっと公共の場で妻がバカにされれば自分が侮辱にも等しいからだ。わたしのことが好きなわけじやない。結婚して日が浅いこともあつて、穏やかな彼は懸命にわたしを愛そと試みてゐる。そんなクラー

スにいつか冷たい瞳を向けられたらと考へると、ぞくぞくと興奮してしまう。

### 「……我ながら、難儀な性癖」

昔、わたしには好きな人がいた。穏やかで品がよくて、彼は金髪だつたけれど少し今の夫にも似ているかも知れない。会うたびにお菓子や花をくれて優しくしてくれたけれど、彼が本当に好きだったのは美人で有名なわたしの妹だった。

それをもう隠さなくてよくなつた彼から向けられた冷たい瞳はいまでも昨日のことのように思い出せるし、きっとそれがわたしの性癖がねじ曲がつた一番の原因だ。

それ以来、すきなひとに愛してると囁かれるより、冷たい目で見下ろされる方が安心するようになつてしまつた。最初から嫌われていると覺悟すれば、傷つくこともない。思春期になつて一人遊びをするようになつて、最初は片想いしていた殿方とやさしく愛し合う妄想をしていた。けれど、全く没頭できなかつた。ためしに一

度、冷たい目で見下ろされながら人形のように扱われる妄想をしたら、びっくりするくらい秘所が濡れてしまつた。

その夜以来、ずっと好きな人に乱暴に扱われる妄想をして自分を慰めている。

「……今日、もし調子に乗つてわたしが一緒に寝ようつて誘つたらイヤな顔したかもなあ」

すっと目を閉じて、クラースの顔を想像する。いつも穏やかな微笑みがいびつに歪んで、わたしを見下ろした。

——どうしたんですかレティシアさん。ちょっとやさしくされただけで、勘違いしたんですか？

「つ♡」

想像の彼が小ばかにしたように笑つた。ぞくぞくつ♡と背中が粟立つて、おなか

の奥が甘く疼く。薄いキャミソールの上からおっぱいを寄せるように揉みしだけば、もう止まらない♡

——ちょっと優しくされただけで、ボクが本当にレティシアさんのことが好きだつて勘違いしちやつたんですねえ。ほら、こんなにいやらしく乳首舐らさせてなに期待してるんですか？

「ちがつ♡ちがうもん♡かんちがいしてないもんつ♡」

妄想のなかの彼が、意地悪く乳輪をつう♡となぞる。自分でも乳首の周りをすり♡すりすり♡と円を描いて焦らせば、だんだんいやらしく息が湿っていくのがわかる。

「んん♡ダメっ♡」

——ダメじゃないでしょ。こんなに乳首ビンビンにしておいて♡乳首いじめてほしいんですよね♡

勃起した乳首の根元に指を添えて、そのまま跳ね上げる。そうして根元と先端を何度も弾けば、また一段と硬さを増してしまって

——ほら、ちゃんと自分のカラダがどうなってるか言つてください♡ほら、レティシアさんの堪え性のない乳首、どうなってるんですか？

「あひ♡ちくびつ♡びんびんでつ♡カチカチでえ♡そこいじられたらおマンコまで濡れちゃうのお♡」

容赦なく自分で乳首を指で弾きながら、妄想のクラースに媚びるように腰を振る♡おまけにぐぐつ♡とかえるみたいに下品に足を広げれば、ショーツからぷくつ♡て膨らんだマン肉が少しほみ出てしまうのがわかる。

「下品なポーズで♡ちくびおにやにーきもちい♡」

——はは♡ほんとうに情けないですねレティシアさん♡こんなザマで本当に古い格式のあるおうちのご令嬢なんですか？　こんなにビンビンなデカエロ乳首し

たエロ令嬢、きっとレティシアさんしかいませんよ♡

きゅつ♡と人差し指と親指で乳首を摘まんで、くにくに♡と左右にひねる。軽く

ひねるた乳首ビリビリして、おマンコ触つてないのに勝手にぬかるんじやう♡

——はは♡セルフ開発でかエロ乳首いじめられてきもちいいですか？ すつご

くコリコリになつてますね♡

クラースの大きな手のひらに乳首を擦り付ける妄想をしながら、自分の手のひらにコリコリ乳首の先端を擦り付ける。手のひらでずりずり♡すると布がすれてしまい♡

——やらしい♡乳首の先っぽ擦り付けてきもちよくなつちゃつてますね♡乳首

そんなにすきなんですか？

「すきつ♡ちくびしゅきい♡」

——まつたく、こんな簡単に気持ちよくなつてふしだらなご令嬢ですね♡乳首カリカリしたらあつという間にイクんじゃないですか？ レティシアさんザコ乳首だから♡

クラースが嘲笑しながら、布越しの乳首に爪を軽く立てる。ピリピリ♡と気持ちいい痺れが頭まで駆け抜けていつて、きゅう♡と爪先が丸まる♡

「あふつ♡も、イキそつ♡乳首だけでイキそうつ♡」

媚びるようにおっぱいぷるぷる揺らしながら、ずーっと乳首をカリカリする♡乳頭にキヤミの生地をねじ込みながら爪立てて、下品に乳首オナニーする♡カリカリする速度がだんだん早くなつて、腰が勝手にヘコヘコと前後に揺れはじめる♡

「あひつ♡クラースしゃんつ♡わたひがなさけにやくチクオナイキしゆるのみてつ♡」

脳裏に浮かぶ夫が、わたしを冷たい目で見下ろす。軽蔑するような声で変態、と

囁かれたのと同時に、乳頭から伝ってきた痺れがおなかの奥で弾けてぎゅう♡と爪先が丸まつた。

「あひつ♡イつた♡いつちやつたあ♡クラースさんおかげにして、乳首イキしちやつたあ♡」

キヤミ越しに乳首虐めしただけなのに♡パンツベトベトする♡自分でもびつくりするくらい淫乱なカラダ♡これじや本当にきらわれちゃう♡

——乳首イキしたおマンコ、どんなにいやらしくなつてるか自分で見てくださいよ♡ちやーんと情けない自分のメス穴見て、どれだけザコメスか自覚してくださいね、レティシアさん♡

本人が絶対言わないひどいセリフに従つてわたしはゆつくりとショーツを剥ぎとつて鏡の前で開脚する。興奮してぷっくり膨らんだ肉土手、テラテラ光った肉ビラ、真っ赤に充血してぬかるんだおまんこ♡ぷっくりしたクリトリスなんて、触つ

てほしそうにビクビクしてる♡

——恥ずかしいメス汁まきちらして、ほんとうにいやらしい♡誰にも抱かれたことのない新品マンコのくせにこんなに発情してトロトロにして恥ずかしくないんですか？

妄想の彼はクスクス笑いながら愛液を掬ってクリトリスに容赦なく塗り付ける。発情期のメス犬みたいに荒い呼吸で同じようにすると、いやらしい肉豆がビリビリ痺れてしまう♡

「んあ♡しゅごつ♡クラースしやんにクリトリスいじめられるのきもちいい♡もつと発情マンコいじめてください♡」

いやらしい言葉でおねだりすれば、夫が不本意そうに眉を顰めながら、クリトリスを手のひらで押し潰す。ふとズボンを見れば、股間の生地がきつそうには盛り上がっていた。誰でもいいから肉欲を処理したくなってるんだ♡

「すきじやなくていいからつ♥だいて♥わたしのことだいてつ♥クラースしゃんつ♥だいすきだからつ♥わたしつ♥」

いまこの部屋にいない男の名前を叫びながら、赤く腫れたクリトリスを揃えた指で覆つて押しつぶす♥粘ついた愛液の音を響かせながら、力任せに肉豆を円を描いて押しつぶす♥

### クチュクチュ♥ぬちぬち♥

こんな下品なオナニー、本人に見られたらぜつたいしにたくなつちやう♥

安っぽい性欲にまみれた夫が、わたしのおマンコを乱暴に手で摇さぶる。いまから挿入するためだけに行われる性急な前戯。まるで義務みたいに雑におマンコかわいがる夫の冷たい瞳を想像すると、ぷくつ♥と肉豆が腫れあがる♥

「イツ♥クツ♥クラースしゃんのこと勝手におかずにしておマンコするのよしゅぎるつ♥ごめんなしやいつ♥ごめんなしやいつ♥ごめんなしやつ♥おおつ♥ごめ

んなしやイキしちゃうう♥」

愛液でドロドロのクリトリスが、ぶるぶる震え出す♥それだけじやなくておマンコのナカの肉襞もパクパクつ♥と切なそうに収縮してるとやさしい夫をおかずにして、下品開脚オナニーしてイッちやう♥

——ほんとうにやらしいメス犬ですね♥ちゃんとイッてください♥かわいくいけたらあなたのおマンコでボクのザーメン処理させてあげますよ♥ちゃんとザーメン処理したいならおマンコアクメしてアピールしてください♥

考えうる限りのひどい言葉を浴びせられて、頭のナカでパチパチ♥と気持ちいのがはじける♥

「おつ♥クラースしやんつ♥イク♥無様イキするのみでつ♥イクつ♥イ……う！」

鏡の前でおマンコ弄りに夢中になつていると、唐突にドアノブが回る。カラダが強張つたけれど、絶頂を迎えるとしていたカラダはすでに止まることができなく

てガクガクと震え始めた。

「え♡やだつ♡まつて♡まつてえ♡」

今絶頂してアクメしちゃうの絶対まずい♡それなのに、尿意に似たものがせりあがつてきて止まらない♡

ガチャリ、と扉が開いたと同時に青い瞳と目が合う。茫然と目を丸くして立ち尽くす 클래스の姿を見ながら、同時に透明な潮がちよろつ♡と漏れ出した。

「あ～～つ♡やだやだ♡クラスしやん、みちややだ♡やだつ♡イクところみられちやうつ♡ごめんにやさいつ♡ごめんなしやいっ♡」

ぷしゅつ♡ぶしつ♡ぶしやああああ♡

透明な液体をまき散らしながら、腰が突き出る。結婚してから一人でセックスしたのは初夜の一度だけ。それもいたわるようなやさしいけれど義務的なセックスで、そのときはちゃんと貞淑に声を抑えていた。

その妻が、まさか自分が仕事で不在の間に、鏡の前でおマンコ広げてオナニーしててなんて。

ああ、おわったな。

ちよろちよろ♡と抑えきれない潮が情けなく最後の一滴まで漏れ出した。

ひとしきり絶頂の快楽を味わったあと、絶望的な気分になる。でも、少し安心している自分もいる。これでもしかしたら愛してもらえるかもしれないという淡い希望をもつて苦しむこともなくなるんだろう。

まともに顔も見れない、部屋にただよう沈黙が気まずい。なんといえばよいかわからぬまま、言葉を探していたらクラースがためらいがちに声を掛けてきた

「……レティシアさん、なんて恰好してるんですか」

「あっ」

指摘されて自分がキャミソール一枚で、ショーツすら身に着けていなかつたことを思い出す。

どこに脱いだかわからずに下着を探していると、骨ばった手が薄い布地を摘まみ上げた。

「ショーツ、ここにありますよ」

羞恥に顔が熱くなりながら手を伸ばせば、ひょいと薄い布地が遠のく。

「クラースさん？」

「……すごいな、こんなに愛液しみ込ませて。ボクが仕事でかまつてあげられないとき毎晩こうしてたんですか？」

色が変わってしまっているクロツチ部分をまじまじと凝視されて、思わず俯いてしまう。

「あ、あまり見ないで……」

「どうしてですか？　さつきはかわいらしいおマンコを鏡に写しながらいやらしくオナニーしてたんですよね？」

クラースがジャケットを脱いで椅子に掛ける。困惑しながら見守っているとシャツのボタンに手を掛けていく。てっきり呆れて出ていくと思ってたのに、まるでわたくしとセックスするために準備をしているみたいだ。

「え、なんで、服ぬいで……」

「寂しい想いをさせてしまったみたいですから、レティシアさんことをかわいがつてあげないと。ボクの名前、呼んでくれてましたよね」

ベルトを緩めてスラックスを寬げれば、膨らんだ屹立がぱるんっと勢いよく飛び出した。ガチガチに勃起してそそり立つそれに、目が奪われてしまう。わたしの下品な声聞いて、興奮しちゃつたんだと意識したらとたんに恥ずかしくなつてくる。けれどもすきな人にどんな形であれ抱いてもらえると考えると、悲しいのに、ぞく

ぞくと興奮してきた。

「すごい♡ガチガチにそそりたつてる……♡」

おなかにつきそうなくらい勃起したそれは、亀頭からダラダラ我慢汁流して早く女のナカにザーメンぶちまけたいっていつてる♡そっか、早くしたいから変態オナニーでアクメキメるドスケベ妻にも優しくしてくれるんだ♡

「クラースさんのそれ、わたしのおマンコで処理していいからね♡初夜はやさしく抱いてくれたけど、本当は我慢してたんでしょ？」

ガチガチに勃起したチンポの裏筋をつう♡と撫でる。そうしたらおもしろいようにピクピクと震えた。

「つ、レティシアさん……！」

「はは♡すつごい♡ガチガチ♡これで容赦なく犯されるところ想像するだけでイキそうになっちゃう……♡」

脈打つそれを軽く手で抜きながら丸みを帯びた先端にちゅっ♡と口づけると雄の臭いが鼻孔をくすぐる。はじめてだからうまくできるかな、と不安に感じながら口に含もうとすると、突然強い力でカラダをはがされた。

「つ、レティシアさん、そんなことしなくていいです」

「あつ、ごめんなさい……」

突然の拒絶に、わたしは気に障ることをしてしまったのかと俯く。

「……ちがいます。触られるのがいやなわけではなく、あなたにお口でご奉仕なんてされたらすぐに出てしまいそうですから」

やさしく穏やかな声で囁かれながら髪を梳かれると、思わず困惑してしまう。まるで本当に大事な女の子に対する態度みたい。

ためらっていると、整った顔がゆっくり近づいてきてから唇に柔らかいものを押し当てられた。

「んっ♡ふつ♡んん♡」

舌を絡ませあうキスをしながら、骨ばった手がいやらしく腰を撫でさすつてくる。そして徐々に下へさがって、肉土手をふに♡とつままれた。

「ふふ、すつごくフニフニですね♡ボクの名前何度も呼びながらここかわいがつてくれてましたね？ ボクにどんなことされる想像してこんなにびしょびしょにしたんですか？」

想像よりもやさしくて甘い声に混乱してしまう。お互いの唾液がぴちゃぴちゃ♡といやらしい音を立てて、頭がぼうつとしていく。

「んあっ♡」

「ほら、ちやーんと教えてください」

キスの合間にやさしく命令されると、ぞくぞくと背筋が粟立つてしまう。穏やかな声なのに逆らえなくて、素直に白状した。

「つ♡クラースさんに、乱暴にされてつ♡やめてって言つてもおかまいなしにおマ  
ンコどちゅどちゅされて、おくちにつ♡ガチガチに勃起したチンポ押し込まれてつ  
♡クチのなかでびゅーびゅーつ♡つてされて♡ザーメンごくさせられてえ♡」

卑猥な言葉が勝手に口からこぼれていく。キスの合間に目を細める彼は、とても  
機嫌がよさそうだった。顔じゅうにキスされながら、クリトリスを二本の指でふに  
ふに♡とやさしく揉みしだかれる。そんなことされたら、もつといやらしい肉豆が  
勃起しちゃう♡鼻にかかった声を出せば、肉豆の裏筋をつう♡となぞられた。

「んおつ♡」

「うん♡それで♡どうなるんですか♡ちゃんとそのかわいい唇でおしえてください♡」

赤い舌がペろペろ♡と濡れた唇をなぞっていく。息がはしたなく荒くなつて、我  
慢できなくなる♡おマンコきゅんきゅん疼いて、早くこの熱を収めてほしくて、ど

んどん恥知らずになつていく♡

「それでつ♡たくさん、ナカに出されてつ♡クラースしやんの氣のすむまで抱いてもらつて♡そのあとはピロートークもされないままにお掃除フェラさせられてつ♡追いすぐるわたしを引きはがして、クラースさんは眉一つ動かさずに部屋から出て行つて、それでわたしが泣きながら自分でおマンコしゆるのお♡」「

「……え？　なんて？」

クラースがクリトリスを撫でる指が止まる。ちらりと上目遣いで顔を見れば、困惑しているように固まっていた。

「どうしたの？」

「……レティシアさんの妄想のなかのボク、なんかひどい男じゃないですか？　妻と愛し合つた後に同じベッドで寝るでしょう、ふつうは」

クラースがもつともな苦言を呈する。愛し合つている夫婦ならそうかもしねない

が、クラスは仕事で忙しいし、身体を重ねたのは一回切り。

「新婚のくせに仕事が忙しくてあなたをないがしろにしてしまったのは謝ります。でもボクは愛する人にそんな無体はしませんよ」

「……？ 愛する人？」

真摯に告げられた言葉はあまりにも現実みがない。幼いころから恋心を抱いていた人は必ず妹を好きになつた。先に結婚したのも妹で、夫となつた人にそれはそれは大切にされている。そして妹も大切にされる自分のことを当然のものとして受け入れている。

わたしには奇跡のように映るそれは、妹にとつては当たり前のことなのだ。わたくはしづつとそれを悔しさやみじめさをなんとか押さえつけて黙つて微笑んでいるだけ。

いままでも、これからも。

そう思つて生きていたから、夫の言葉になんて反応すればいいのかわからない。

「……そんな」

無理しなくていいのに、と喉元まで出かかって飲み込んだ。少なくとも夫は、わたしに紳士的な態度を取つてくれているのだから、それを否定するのは彼の面目を潰すことになる。たとえ家名目当てであつても、彼がわたしのことを大切にしたいというなら今夜くらいは付き合つてあげなければ。

「……わたし、好きな人にひどいことをされるの想像すると、興奮しちやつて。でも、今夜はクレースさんのしたいようにわたしを抱いてほしいな」

不慣れながらに甘えるように細身だけれどもたくましい胸板に顔を埋めれば、筋肉越しに心臓の跳ねる音が聞こえた気がした。気のせいかな。

「わかりました。レティシアさん。ボクのしたいようにあなたを抱きますね」  
につっこりと微笑むとまた整つた顔が近づいてきてキスされる。そのままやさしく

ベッドに身体を沈められて、ひとつ♡と秘裂に血管が浮き出でているたくましい肉竿を添えられた。

「あ」

なんだ、都合のいいこといつてやつぱり挿入れたいんだ。

がつかりしたような安心したような複雑な気分になりながら、クラスを見つめる。

「まだ挿入れませんよ。レティシアさんに誤解されたくないですからね」

——誤解も何も、クラスがわたしを好きになる理由がなさすぎるので誤解ではないんだけどなあ。

そんなことを考えていると腰を引き寄せられて、ベッドの上に座っているクラスのほうへ引き寄せられる。雁首を勃起したクリトリスにひとつ♡と押し当てられて、その熱さにとろお♡と愛液がしたたる♡

「あ♡」

「レティシアさんがボクの名前一生懸命呼びながらひとりエッチしてるの見て、こんなになつちやつたんですよ♡」

ゆっくり腰を前後に振られて、ずりゅつ♡ずりゅりゅつ♡と肉豆を押しつぶしながらチンポを擦りつけられる。ドクドクと脈打つのを感じ取つて、またクリトリスが大きくなつてきちゃう♡

「だ♡それっ♡クラスさんのおチンポビクビクつ♡つしててのかんじちゃう  
♡」

「ああ♡かわいい♡素股きもちいいですね♡レティシアさんのおマンコ熱くてぬるぬるで本当にかわいいですよ♡」

かわいい♡かわいい♡と囁かれながらクリトリスを熱くて硬いチンポでずりゅずりゅ擦られたら、おマンコが照れてブルブルして震え出しちゃう♡

「～～つ、かわいいっていうの、やだつ」

「ん？ どうしてですか」

「そんなこといわれたら、どうすればいいのかわからなくなっちゃう……」

ひどい言葉をいわれる準備ならいつでも出来てゐるのに、そんなふうにあまやかされるとどうすればいいかわからない♡想像とあまりに違いすぎて、戸惑つて心臓がドキドキしてしまう。

「かわいいっていわれるだけで、照れちやうんですか？ ほんとうにかわいい人だなあ。ボクのこと思つてあんな大胆なオナニーしてたのに、かわいいといわれるのダメなんだ？」

少し碎けた口調になつた夫は、腰をゆっくりと動かしながらわたしの顔を見つめる。欲情してギラついた瞳と視線がかち合つて、ビクつ♡と腰が跳ねた。

「ダメですよ、レティシアさん。逃げちや。あなたがボクのこと信じてくれるまで、

## 逃げちゃダメ

「あつ♡」

ねつとりお互いの粘膜を擦り合わせれば、ぐちゅつ♡ぐちゅつ♡という卑猥な水音が響く。クレースのあつたかい肉竿がビクビク震えながら、わたしのおマンコに先走りを塗り付けていく♡これから種付けするためにマーキングしてみたいで、おマンコが痙攣してしまう♡

「はは♡レティシアさんのおマンコピクピク～～つ♡つてしてますね♡トロトロで熱くてとってもきもちいいですよ♡ぷにぷにのマン肉がボクのチンポ包み込んで、きもちよくしてくれてます♡レティシアさんも、レティシアさんのおマンコも擦り付けるたびに濡れちゃって、健気でかわいいです♡」

かわいい♡かわいい♡と囁かれながら、熱い粘膜を擦り合わせられて頭に気持ちいいのと甘い言葉が同時に流れ込んでくる♡

——だめだ、これ♡

本当にクラースがわたしのことすきなんだつて勘違いしそうになる♡こんな素敵な人がわたしのこと好きになるはずないのに、勘違いしちゃう♡好きになつたら傷つくだけなのにつ♡もう傷つきたくないのに♡

「あ♡や、やだつ♡クラースさんつ♡は、早く挿入れてつ♡お、おねがいっ♡子宮せつないのつ♡はやくクラースしやんので、奥トントンつてしてほしいの♡」

恥も外聞もかなぐり捨てて張り詰めた肉竿を撫でておねだりする。クラースは切なそうに眉をひそめたが、それでもお願ひをきいてはくれないかつた。

「だーめ♡今日はボクの好きなようにするつて言いましたよね♡だから、まだおあづけです。いつしょにイチャイチャセックスしましょ♡」

ぐにゅつ♡とガチガチのチンポがクリトリスを押しつぶしたまま、両手でおっぱいを寄せられてやさしく揉みしだかれる。骨ばった手がやわらかい肉に食い込むの

を見て男の人におっぱい揉まれてるんだって状況を自覚して、いまさらなのにドキドキしてしまう。いつも自分で寂しくもみもみ♡してたおっぱい、クランースに揉まれちゃってるんだ♡想像の夫じゃなくて本人の手は、想像よりもずっとあたたかくてやさしい♡

「あ♡」

「おっぱいも寂しそうにしてるから、よしよししてあげないと♡乳首がキャミソール押し上げてぽちつ♡ってなつてますよ♡」

先っぽを指の腹でりすりすり♡されて、じわじわとした気持ちよさが腰に溜まつていく。切なさに思わず腰をくねらせれば、ぐにゅつ♡と硬い肉豆がチンポに押しつぶされて、喉を反らしてしまった♡

「んひつ♡」

「あれ、どうしたんですかレティシアさん♡乳首すりすり♡されて腰にくねらせて

自分でおマンコ刺激しちゃいました？ 素股気に入ってくれたんですね♡ほら、も一つとたくさんぐちゅぐちゅつ♡つてしてあげますからふたり一緒に気持ちよくなりましょ♡」

ペろん♡とキャミソールをまくられて、ぷるん♡とおっぱいがまろび出る。ぷくつ♡と勃起した乳首を両手できゅつ♡と摘ままれてシコシコされながら、夫が腰を前後に突き出す。反り立つたチンポがクリトリスをめくり上げるように引っかいて、ビリビリとした気持ちいのが脊髄を通って頭を揺さぶる。亀頭で芯を持ったクリを引っ搔かれるたびに腰がガクガク♡って勝手に震えちゃう♡

「ひゅつ♡クラースしやんつ♡おっぱいとクリいつしょにいじるのらめつ♡」「ふふ、そういうときはダメじゃなくてきもちいい♡つて教えてください♡」

愛液と先走りでトロトロのクリトリス、ずりゅずりゅされながら、乳首もぎゅう♡と指で搾られて、根元から先端まで抜かれるときもちよすぎてわけがわからなく

ない♥

「～～つ♥しょれつ♥これえ♥らめつ♥きもちいつ♥きもちいいつ♥」

おマンコの粘膜とクリトリスがぶるぶる♥って震えて、乳首もこりゅこりゅになつて、オナニーなんて比べ物にならない♥こわい♥きもちよすぎてこわい♥「や、 클래스しやん、へん♥わたしのからだ、へんなのつ♥こんなのはしないつ♥こわいっ♥こんなきもちいいことされると、クラスしやんのこと、もつとすきになつちやう♥」

腕を掴んでいやいやと首をふれば、がつしりと腰を掴まれてクラスの腰を動きが激しくなる♥

「おや、うれしいこと言つてくださいますね♥いいですよ♥もつとすきになつてください♥」

おなかの奥がきゅう♥つと熱くなつて、尿意に似た感覚がぶるぶる♥とおマンコ

を震わせている♡でちやう♡えっちな素股されながら、潮吹きアクメしちゃう♡  
「あつ♡クレースさ、ああ♡でちやうつ♡イク♡も、イクつ♡ガチガチチンポでクリトリスずりゅずりゅされてつ♡潮吹きアクメしゅるつ♡クレースさんのカラダにかかっちやう♡おねがいっ♡イッちやうからこしとめてえつ♡」